

日本イギリス哲学会関東部会 第99回研究例会

日時 2017年7月15日(土) 14:00~17:15
場所 慶應義塾大学三田キャンパス 北館1階 会議室2

プログラム

14:00~15:30

テューダー朝イングランドの愛国主義
『イングランド王国の繁栄』における経済思想を手掛りに

山根 明大

15:45~17:15

パークリにおける「生得思念」について

中央大学兼任講師
竹中 真也

関東部会担当 伊藤誠一郎 (seiichiro[at]mtj.biglobe.ne.jp)
矢嶋直規 (yajima[at]icu.ac.jp)
*[at]を@に直して下さい

日本イギリス哲学会関東部会第 99 回例会（2017 年 7 月 15 日、慶應義塾大学）

【報告要旨】

テューダー朝イングランドの愛国主義
『イングランド王国の繁栄』における経済思想を手掛りに

山根明大（やまね あきひろ）

従来の思想史研究において、テューダー朝イングランドの愛国主義は古典的ヒューマニズムの観点から説明される傾向にあり、当時の愛国主義は古代ローマ（特にキケロ）の共和主義的伝統に依拠した、「コモンウェルス (commonwealth)」に対する「活動的市民 (active citizen)」の献身、と定義されてきた。即ち、テューダー朝イングランドでは、「公共のものごと」や「共通の利益」を意味する共和政ローマの「レス・プブリカ (res publica)」が「コモンウェルス」に読み替えられ、数多くの社会経済改革が喚起されたのである。「コモンウェルス」は当時、君主を頂点とする階層社会を前提としながらも、「共通の利益に関する事柄」あるいは「国民に利益をもたらすことを目的とする王国」の意味を含み、政治共同体の全構成員が共に利益を享受して繁栄するという、一つの理想的なヴァイジョンを提示するものであった。

しかしながら、愛国主義を「自己の属する政治共同体に対する愛着、またそうした愛着から生じる共同体の利益のための言動」といったように、より一般的な意味で捉えるならば、「コモンウェルス」に対する「活動的市民」の献身という定義は有力ではあるものの、テューダー朝イングランドの愛国主義の重層性を等閑視していると言わざるを得ない。換言するならば、当時の愛国主義を読み解く鍵は（従来の思想史研究が強調してきたような）古典的ヒューマニズムにあるのではなく、むしろそれ以外の要素にあるのではなかろうか。本報告では、こうしたテューダー朝イングランドの愛国主義の重層性を考察するため、『イングランド王国の繁栄 (*A Discourse of the Common Weal of this Realm of England*)』(1581 年刊、ただし執筆年代は 1549 年頃)における経済思想に注目し、(古典的ヒューマニズムと親和的な)「コモンウェルス」に対する「活動的市民」の献身とは異なる、イングランドの経済的利益の主張（近代的な「国益 (national interest)」に近いもの）について論じたい。

バークリにおける「生得思念」について

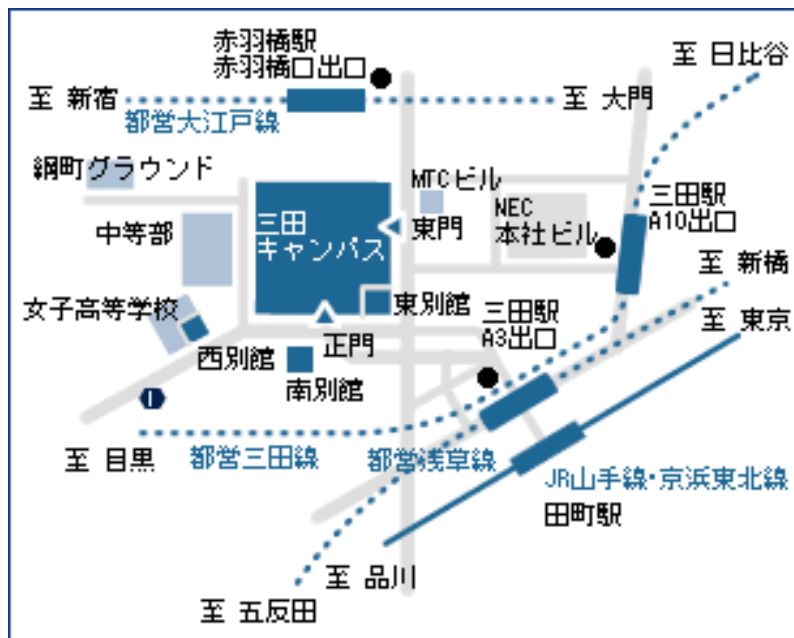
竹中真也（たけなか しんや）

バークリと言えば、経験論の哲学者の一人とみなすのが、哲学史における常道だろう。じっさいロックの『人間知性論』からの影響は甚大で、バークリは、言葉遣いから主要な概念にいたるまで、きわめて多くのことをロックから吸収し、それらに基づいて、みずからの論述を展開してさえいる。のみならず、バークリには、ヒュームとの類似点もある。物体間の因果関係を、諸観念における習慣的な結合にすぎないとして、のちのヒュームを先取りするような議論をも彼は展開しているからである。したがって、これらの観点からすれば、ロックとヒュームのあいだにバークリを位置させることは、道理にかなっているし、それほど不自然なことではないようにも思われてくる。

しかしながら、ことはそう単純ではない。たしかに、上述のように、バークリの議論にロックやヒュームの議論と重なるところがあることは認められるし、経験を重視するという発想はバークリの論述にも容易に読み取ることができる。それでも、その重なりのほかには、バークリ独自の議論があり、それを考慮するなら、バークリの立場は経験論者と割り切ることがきわめて困難になる。その議論とはすなわち、「生得思念」を容認するという、いわゆる経験論者の出発点から逸脱したものである。バークリは、前期の著作『人知原理論』においては、そうしたことに明確に触れていなかったものの、後期の著作『サイリス』になると、「生得思念」による形而上学を展開し、真正でないにしてもある種のプラトニズムを肯定的に評価しているのである。

もちろん、このようなことは、先行研究においても幾度も指摘されてきたし、ある一部の哲学史において論じられることもあった。しかし、そうだとしても、『サイリス』における論述をひとつひとつ丁寧に読み解くという作業は、あまり行われてきたわけではないだろうし、そこにおいて実質的にいかなることが議論されているのかも、それほど明白なわけではないだろう。そこで、本報告においては、『サイリス』におけるバークリによる「生得思念」の議論を詳細に分析して見ることで、バークリ哲学の性格を見直し、その結果として、バークリの、哲学史におけるしかるべき地位を明らかにしたい。

【会場案内】

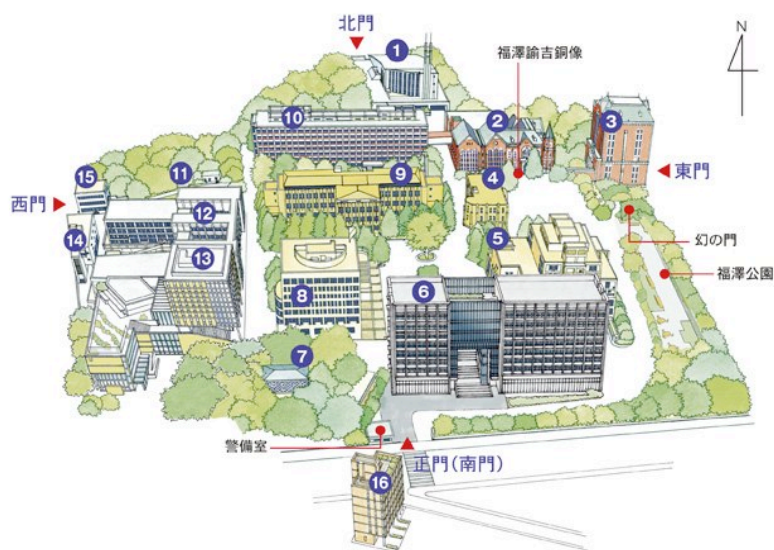


108-8345 東京都港区三田 2-15-45

JR 山手線・京浜東北線 田町駅下車、徒歩 8 分

都営地下鉄浅草線・三田線 三田駅下車、徒歩 7 分

都営地下鉄大江戸線 赤羽橋下車、徒歩 8 分



北館は①の建物です